

Title	ソクラティク・ダイアローグ
Author(s)	森, 芳周
Citation	臨床哲学のメチエ. 2000, 7, p. 4-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7532
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ソクラティク・ダイアローグ

Das Sokratische Gespräch

訳者記

ソクラティク・ダイアローグ(通称SD)は、ドイツを中心にヨーロッパ各国で行われている対話による哲学的実践である。ここに訳出した"Das Sokratische Gespräch"は、SDを主宰している2つの団体、ソクラティク哲学協会(PPA)と哲学・政治アカデミー(GSP)が出版しているSDの公式パンフレットである。2000年夏に開催されたSD国際学会に参加した臨床哲学研究室の院生が現地で入手し、PPA GSPから翻訳の了解を得た。SDの説明やルールとその歴史的、哲学的背景が簡潔にまとめられており、よき入門書となっている。しかし、大切なことは、SDを実践し、楽しんでみることである。

哲学・政治アカデミー Philosophisch-Politische Akademieのホームページ http://members.aol.com/PPAev

序文

ソクラティク哲学協会 Gesellschaft für Sokratisches Philosophieren(GSP) と哲学・政治アカデミー Philosophisch-Politische Akademie(PPA) は、長年、ソクラティクセミナーを提供している。セミナーは、6—12人の「参加者 Teilnehmerinnen und Teilnehmern,participants」(注)からなるグループで、様々な哲学的あるいは数学的テーマがソクラテス的方法に従って、1週間かけて徹底的に扱われる。

GSPで実践されている形式の「ソクラティク・ダイアローグ Sokratischen Gespräche, Socratic Dialogue(以降は、単にSDと表記する――訳者注)」は、今世紀、レオナルト・ネルゾン Leonard Nelson とグスタフ・ヘックマン Gustav Heckmann によって古典的SDから集団での対話的な哲学の方法にまで発展させられた。1922年、レオナルト・ネルゾンは、この対話形式に基づく方法を、ソクラテス的方法についての有名な講演で明らかにしている。「つまり、ソクラテス的方法は技法でも哲学でもなく、哲学することを学ぶことであり、哲学者について教える技法ではなく、

生徒を哲学者にすることである。」(Nelson:Gesammelte Schriften,Band I,S.271)

近年では多数の人たちが、ソクラテス的方法が思考力や判断能力を鍛えて伸ばし、自立し確固とした認識を獲得する力と対話能力を発展させ、自己の理性への信頼を強化する、ということを経験している。様々な年代、異なった人生経験を持つ人々からなるグループの中での対話的思考や発言は、多くの参加者によって、社会的、感情的に意味のある出会いの形であるとも評価されている。

何がSDの本質を成しているかという記述は困難である。この小冊子が示唆を与えるが、かのような対話への参加によって得られる経験を十分には説明できない。ネルゾンはそのように表明している。ネルゾンはソクラテス的哲学をバイオリン演奏にたとえて、次のように明言している、「バイオリンを演奏するとき、奏者は演奏をどのように仕立て上げるかという問いには、自分の技で何かを実演してやることができるが、どのようにバイオリンを扱うかということを分析することはできない。」(Nelson:Gesammelte Schriften,Band I,S.271)

この冊子は、SDの「進行役 Gesprächsleitern, facilitators」によって記された。ここでは、SDの様々な局面を実践的、学術的観点において示すことにしている。すべての局面が、対話の参加者すべてにとって、同様の関心を持つというわけではない。

この冊子は4部構成になっている。第1部は、SDに関心を持つ者に対し、簡単な手引きとなる。ここではSDの条件、形式、要素についての情報が述べられている。第2部では、哲学的なコンテクストの中にSDを位置づける。第3部では現代の重要な教育学および心理学の潮流との関連を説明する。第4部で、GSPの催し物と進行役を紹介し、文献や連絡先を掲載する。(今回は、紙面の都合上、第4部を省略して掲載している——訳者注)

この冊子の特に第2部と第3部では、ソクラテス的実践の背景ではどのような哲学的および教育学的問いが議論されているかが示されるだけである。これらの章は専門的に関心を持つ読者に向けられている。したがって、これらの章の理解はSDの参加者にとって必須のものではない。

(原注)読みやすさのために、以降は女性形を併記しないことにする。Teilnehmer、Leiter、Interessent という男性形で、常に男性と同時に女性も考えられている。

SDとは何か?

S Dでは、参加者が、その都度の問題に対して自分自身の理解に達することになる。グスタフ・ヘックマンはそれについて次のように書いている。「目的は、参加者が理解を得ること、つまり自分自身の頭で理解を見出すことである。」理解とは、感覚的知覚によって媒介された知識Kenntnisや、別の知覚によって媒介されている学識 Wissen とは別物である。どちらも自分の頭の中で反省された理解を手に入れることができるだけである。他の権威に依存しない相手との対話こそが、本質的に理解を得るための助けとなる。

自分自身の理解の探求の際には、真理を得ようとする努力が探求の力となる。個々の思考は、

必然的に限られており、個人の経験と感情によって影響される。SDでは、我々は、自分の考えを他人の考えに照らして再検討し、場合によっては、訂正したり修正するようにする、そうして 共同して思考し、参加者全員が一致することができる「言明」に至るよう努力する。

参加者は繰り返し次のことを確認する。対話はさらに広がりをもち、参加者は日々の生活でも

対話に批判的に参加し、正確に話を聞き取り、言い回しについては質問し、ドグマや単なる標語に毒されないようにするのである。自信を深めるのは、権威による判断を受け入れることを頼りにするのではなく、自分で考え論拠を示すことによって確証ある判断に至るという経験によってである。したがって、SDは直接的には政治的なテーマを扱うことがなくても、主義主張にとらわれない対話形式という他に、一人前の市民を育成するという意味で、政治的な作用を持っている。倫理的な問いについて深く考えることもまた、その都度扱われているテーマをこえて、生き方や社会生活上の諸問題との対決の際の道標となりうる。



Gustav Heckmann

前提条件

SDへの参加には、哲学の予備知識はまったく必要ない。SDに参加する際に必要なものは、「普通の」思考力とこういった方法に応ずる用意だけである。

S D参加の前提条件は、対話の参加者各々が自分自身の意見を表明するよう努力し、何らかの権威を引き合いに出さないことである。参加者は自分が納得していないテーゼを主張することもすべきでない。S Dでは、参加者は自分が述べたことについて理由をもつことが課される。こういった前提の下でのみ、対話の参加者すべてが互いに真剣に受けとめあうことができるし、真剣に受けとめられることを要求できる。議論や根拠を交換することによって、次第にうまくいくようになると、はじめは対立しているように見える見解についても、核心が明らかにされていく。S Dでは、正義を維持することが重要なのではなく、共通の関心事となっているのは、よりよい理解に到達するということである。

S D 成功の前提条件は、すべての参加者が対話のはじめから終わりまで継続して参加することであり、積極的に対話に参加し、明確に意見を述べ、はっきりと話をして、長々と演説をせず、他の参加者の言うことをよく聞き、理解しようとする用意である。参加者の間の意志の疎通が強くなればなるほど、対話の成果はよりよいものになろう。

SDの進行

その都度の問題設定から出発する際、通常はできる限り自分で体験した「例Beispiel,example」がテーマとして求められ、分析される。数学的テーマの場合には、具体的な例ないしは図形から始める。SDのもっとも重要な「ルール Regeln,rules」は以下のものである。

- ・参加者すべては自分自身の考えを述べるのであって、「権威」に基づく意見は論拠としては 有効ではない。
- ・テーマは、具体的なものから出発し徐々に抽象化されて、審理される。したがって、通例、 まず参加者の(一人の)個人的な経験領域に基づく具体例が審理される。
- ・問題についての参加者間の実際の合意が、「成果」を性急に求めることより優先される。
- ・参加者すべての協力の下で、一歩一歩進んでいく。
- ・対話の進行の中で提出された意見や推測、疑問に対して、その都度、その適否が説明づけられ、検証されることになっている。
- ・参加者は、全員が一致できる判断を得るために共同で努力する。

対話のグループが、全員が一致できる一つの判断を獲得したのであれば一定の合意に至っている。 そのような合意が目指されているのだけれども、参加者は合意を焦って、心の中の懐疑を引っ込めてはならない。参加者が根拠のある懐疑を持っている場合には、参加者すべてが合意を疑うことができる。参加者が早い時点である判断に明確に一致したときにも、こういったことが可能となる。重要な「言明 Aussage,statement」や思考の歩みは、その基本線が全員に見えるように書き出される。

グループはまず第一に、選ばれた具体的な例についての合意を求めるよう努力する。この時には、記号の使用法や概念の内容の解明が含まれることもよくある。重要なことは、例に対して下される判断である。さらに、はじめに下された判断の基礎になっている原理や確信、価値が明らかにされる。そのときには、まず例に対して出された主張がどこまで普遍的に妥当するのかということが審理の対象に入れられる。それから、さらに広い考えや議論が検証され、場合によっては修正が行われるべきである。

S D がうまくいくかどうかは、グループの協力によるものであり、指導だけによるのではない。 どの参加者もルールの遵守に責任を負っているが、十分な柔軟性と建設的な対話の進行にも共同 責任を負っている。

進行役の仕事

S D の進行役は、関与しなければならないテーマを事細かに設定する。しかし、対話には内容的に関与することはせずに、対話の進行に注意を払い、対話を統制してグループができるかぎり生産的な認識へと至ることができるようにする。特に、進行役は次のことに注意を払わねばならない。

- ・参加者が思考の流れからそれないようにすること
- ・参加者がお互いに理解し合い、他の参加者が言ったことを本当に理解すること

- ・すべての参加者の関与の下で、一歩一歩進んでいくこと
- ・提出された主張は論証されること
- ・共同の審理の中で進展が行われること
- ・進行役の統制の決定は、問題についての共通の理解に役立つこと
- ・全員がひとつの合意を得ようと努力すること

このような対話の成功に不可欠なことは、すべての参加者が対話に関与して、問題に取り組むことである。進行役がSDに参加しないということによって、進行役は自分の責務に集中することができる。進行役は、参加者が自己の認識を得るための障害を取り除こうとする。テーマを熟知しているということが進行役の助けとなり、グループに対して重要な対話の貢献を生産的にしうるし、対話の進行を統制して共通の見解を可能とする。

メタダイアローグ Metagespräch, metadialogue

こういった方法は当然のように思えるが、実践はそれほど容易ではない。参加者はみな根気、 共感能力、自制が求められる。集団力学のある進行においては、緊張関係よりもむしろ紛糾に至 る。対話のそのような障害を除くために、メタダイアローグ、つまり対話についての対話が導入 される。メタダイアローグはしばしば対話の大きな助けになる。進行についての曖昧な事柄、怒 りやその他の障害は、後でメタダイアローグで申し立てられ、取り除かれるという意識があるた め、参加者は安心して対話に集中できる。メタダイアローグでは方法についての疑問も明らかに される。最後に、通常の対話の中ではもはや合意が得られない場合には、メタダイアローグは、 必要とあればさらなる進み方について合意する機会、つまり戦略的ダイアローグを導入する機会 を提供する。

通常、SD経験者が、メタダイアローグの進行をつとめる。本来の進行役はメタダイアローグに参加する。

SDのテーマ

SDに相応しいテーマとは、熟考によって答えを見出すことができ、すべての参加者の経験領域に受け入れられるものであり、そういったテーマだけが相応しい。経験的あるいは歴史的な研究が必要だったり、主観的な答えしか存在しないテーマは、SDには相応しくない。したがって、主に、倫理的、認識論的あるいは数学的テーマが問題とされる。倫理的なテーマの場合には、教育上のテーマ、政治的テーマ、心理学的なテーマに力点が置かれることがある。ここで最近扱われたテーマの例をいくつかあげておく。

・不正とは何か?

- ・我々は何に対して責任があるか?
- ・我々の生を規定する価値はあるのか?
- ・「意味のある sinnvoll」とはどういう意味か?
- ・どのような規準で、よい教育者が特徴づけられるか?
- ・何が生をよい生にするか?
- ・自然は権利をもつか?
- ・正当な不平等はあるか?
- ・自由と国家は一致するか?
- ・堕胎の問題は女性だけに委ねられるべきなのか?
- ・何が我々に、勇気を失わない力を与えるのか?
- ・どのような前提の下で、我々は何かを真だとみなす権限を持つのか?
- ・主張を根拠づけるとはどういうことか?
- ・同一の辺と同一の角度をもった同一の平面で囲まれた物体は存在するか?
- ・3以上のどの素数も6の倍数の隣の数であるか?

原則的に、どんな哲学的あるいは数学的テーマでも、日常の経験に十分に近いものであれば有効である。一回のSDに対して進行役は、哲学の様々な分野からテーマを選び出し、数学的なテーマを提案するようにつとめる。

テーマが選ばれて書き出されると、参加者はテーマに関心を持ち、グループは自由に使用できる時間で一つの成果に達することができる。

数学的なテーマは――少なくとも、このセミナーで立てられているテーマは――一定の観点では、ソクラテス的な仕事とって相応しく、有益である。数学的なテーマは、どの人も自由に使える図形や数字に関する基本的な経験に関連しており、したがってどの人も直接的に近づくことを可能にする。我々が使用する概念の内容について一致することは、たいてい他のテーマよりも簡単である。だから、経験上、グループは始めの問いに対して満足できる答えにより早くたどり着く。感情的な妨げに至ることも少ない。

数学的テーマのこういった長所に対して、参加者から「数学はまったくできない」という心配が頻繁に起こる。しかし、そうこうしているうちに、こういった心配が何の根拠もないものだと判明する参加者の数も多く、数学的な対話の間に、初めて自分の思考力によって数学的な理解へと至ることができるという、思いがけずそして満足のいく経験をする参加者も多い。

SDの伝統

レオナルト・ネルゾン(1882-1927)はゲッティンゲン大学の哲学教授だった。彼が1927年にわずか45歳という若さで亡くなったとき、大部の著作を遺した。ソクラテス的方法の展開は、疑いなく、もっとも重要な教育学の業績に属している。彼はこの方法を自ら実行し、1922年12月

11 日のゲッティンゲンにおける教育学会の講演で発表した (Leonard Nelson:Gesammelte Schriften,Bd.I,S.269-316)。

ゲッティンゲンでのネルゾンの聴講者の中に、グスタフ・ヘックマン (1898-1996) がいた。彼は、当時、数学・物理学・哲学を学ぶ学生で、ギムナジウム時代以来、真理を求めあらゆるドグマを退けるソクラテスの態度に心酔していた。彼は、ソクラテス的方法の中に、人間を指導し、平等な議論の中で、お互いに自分の考えを明確にしていく助けとなり、また深化された理解へと到達するという可能性を見出した。グスタフ・ヘックマンは、ネルゾンの下でソクラテス的方法を経験するにつれて、この方法を習得し、実践していこうと決心する。

マックス・ボーン Max Born の下での博士号取得 (1924) と高等教育職 das höhere Lehramt の国家試験 (1925) の後、ヘックマンは 1927 年から 1931 年まで、ネルゾンによって設立された全寮制学校 Landerziehungsheim Walkemühle で教師になった。1933 年に学校と共にデンマークに、後にイギリスへと亡命した。1946年には帰国し、ハノーバーで哲学および教育学の教授職についた。

グスタフ・ヘックマンは長年にわたって、ソクラテス的方法を成人教育 Erwachsenenbildung と教員養成 Lehrerbildung で実践した。彼は、ソクラテス的方法をさらに発展させ、1969年から S Dを指揮する青年グループを指導していた。このグループからGSPができあがり、ヘックマンと彼の妻シャルロッテ Charlotte は GSP の名誉会員となった。

ソクラティク哲学協会

「ソクラティク哲学協会GSP」は進行役の連合であり、レオナルト・ネルゾンとグスタフ・ヘックマンの伝統の中でSDの実施を継続し、ソクラテス的方法を実践的にも理論的にも発展させることと進行役の養成を課題としている。GSPはハノーバーを本拠とする登録法人である。

GSPはボンにある哲学・政治アカデミーPPAと密接な協力関係を持っている。PPAの目的は、カント-フリース Fries-ネルゾンの伝統の中で批判哲学を促進し、個人、社会、国家にとってのその重要性を明確にすることである。こういったことは、SDはもとより、出版物や催し物によって行われる。

GSPとPPAの共同作業は、SDの実施だけに及ぶのではない。毎年1月にGSPの会員総会が開かれ、そこで基本的な問題と組織上の問題が検討される。その後、年次計画がすべての希望者に発送される。ヴユルツブルクでは、定期的に、共同して、SDと関連する実際的なテーマで、学術的な催しが実施される。寄稿論文と討論の成果が『ソクラティク哲学 Sokratisches Philosophieren』というシリーズで出版される。さらに、GSPはPPAの支援を伴って、関心があり、時間が十分あるかぎり――例えば講演会ようなセミナーを開催する。1998年4月、グスタフ・ヘックマンの生誕100周年の際に、ロックムLoccumのプロテスタントアカデミーで、「ソクラティク・ダイアローグ――哲学的および教育学的実践の可能性」というタイトルの下で専門的会議を開催した。講演とワークショップで、様々な角度からテーマが照らし出された。

後で挙げられているこれ以外のGSPの催しに加えて、GSPに参加している進行役の中には、週末や別の期間に――例えば、長期間にわたって平日の夕方に――他の担い手と協力してSDを提供している者もいる。大学や学校、その他の教育機関で働いている進行役も多く、職務の範囲内でソクラティクセミナーを行っている。関心のある方のために、この冊子の最後に、こういった地域的なSDを行っている進行役の住所を掲載している(今回は訳出していない――訳者注)。こうしたSDに続けて参加することが、SDの成功に不可欠の条件である。SDは、学校での倫理教育の準備段階としての教員養成や研修の課程にも関心を広げている。GSPはこういったことにも関与している。

GSPは、参加者の範囲を拡大し、レオナルト・ネルゾンとグスタフ・ヘックマンの伝統の中で、SDを指導することのできる人をもっと多く獲得したいと思っている。そのための第一の条件が豊富な経験をすることであり、それは多くの進行役の下で、様々な領域のテーマの対話に参加することによってのみ得られるものである。理論的な知識や個人的適性の他に、活動は無給で多くの時間が求められるので、大きな責務が求められる。進行役はみな、参加しているか、あるいは指導してきたSDの細かな観察・分析・反省を通して、自身の進行のスタイル Leitungsstil を見つけださねばならない。はじめのうちは、助言者との共同作業が用意されている。SDの指導の手ほどきの詳細な説明は、『ソクラティク哲学』シリーズの2巻133ページ以下にある。

国際的な協力関係

批判哲学促進協会The Society for the Furtherance of the Critical Philosophy(SFCP) - Gesellschaft zur Förderung der Kritischen Philosophie- は、1940 年にイギリスで、公益的な組織として設立され、その当初から、SFCPの会長が哲学・政治アカデミーPPAの会員であったことで、PPAとは密接な関係があった。

ここ数年で、PPA、GSPとSFCPの協力関係が、特に国際学会の共同開催によって強まった。その学会の第1回は――テーマは批判哲学――1996年にイギリスでひらかれた。この学会では、進行役はイギリス国内はもちろん、ドイツ、オランダから集まった。全開催行事とも英語で行われた。

第2回大会は、1998年にオランダの会員が組織し、SFCP、PPA、GSPと国際哲学研究会 Internationalen Philosophen-Schule(ISvW)によって援助された。このときには4つのソクラティク・グループ sokratischen Gruppen が行われ、それに続いて、ワークショップでは、オランダで発達しているソクラテス的方法を工場や官庁に適用することに取り組んだ。第3回国際学会は2000年7月に「ソクラティク・ダイアローグと倫理」というタイトルの下、ロックムで英語を使用して行われる。ここでも分科会の他に、ワークショップと講演がプログラムに入っている。

国際的な共同作業は、刺激に富み、啓発されると感じられる。――英語を話す人たちにとって、 ソクラテス的な作業に参加することによって、その試みへの関心を高めることができ、SFCP お よび他の諸組織は、おりにふれて、イギリスの様々な地方で、ソクラテスのウィークエンド sokratische Wochenenden を催している。

1998年にSFCPは批判哲学についての刊行物を刊行しはじめた。第1巻は、SDについてのネルゾンの講演を収録している(英訳)。第2巻は、1996年大会のフェルナンド・レアルの2つの講演を含んでいる。

S DはSFCPの活動の重要な部分ではあるが、それよりも批判哲学の促進に向けた活動の方がずっとまさっている。定期的に発行しているニューズレターでは、活動方針と進展が示されている。ニューズレターの入手先は、Rene Branton-Saran,22,Kings's Gardens,West End Lane,London NW6 4PU, Großbritannien である。

オランダでは、近年、ソクラテス者たち Sokratikern のサークルができている。このサークルの構成員は、定期的に S Dを開き、例えば、アメルスフォールト Amersfoort 近郊のレースデン Leusden にある哲学インターナショナルスクール Internationale School voor Wijsbegeerte(IsvW)で行っている。そこでは、毎年、3回のウィークエンドセミナーと夏期休暇中に1週間のセミナーが開かれる。オランダでは、S Dへの関心が大きくなってきており、とくにソクラテス的方法を企業コンサルタントや授業で成人教育に適用することなどに関心が集まっている。

ソクラティク・サークルの 50 人の会員はすべて哲学者である。サークルに参加しようとする人には、まず経験豊かな進行役が伴う。このグループは 1999 年以来、哲学プラクティス協会 Vereniging voor Filosofische Praktijk(VFP) の一部会となっている。このグループはインタービジョン、継続教育、方法的演習の実行に取り組むいくつかの小サークルからなる。グループの会員の中には、ソクラティク・プラクティスを本職としている者や副業としている者もいる。

GSPのSDに関心のある人が諸外国から参加することで、母国でもSDを実践しようとすることへと結びつく。すでにチェコでは、プラハ大学と協力してGSPの会員によって指導されたSDが行われているし、それ以上のことも計画されている。フィンランドでは、毎年熱心な試みが行われている。

哲学のコンテクストにおけるSD

ソクラテスの対話とネルゾンのソクラテス的方法

古典的なソクラテスの対話とネルゾンのソクラテス的方法の比較によって、まず両者の対話形式の異なった構造が明らかになる。ソクラテスの場合、本来、2人だけ――ソクラテスと彼のその都度の対話者――の間での対話ということが問題にされているのだが、ネルゾンの場合は、一緒に話をする数人の間の対話が問題となる。両者とも産婆術的な目的を持った対話であり、その対話では、対話の相手や参加者は教えをうけるのではなく、自分自身の判断へと至るように援助される。

ソクラテスもネルゾン的な対話の導き手も、対話が成功するように様々な装置を投入している。 ソクラテスの場合は、何よりも対話を性格づける質問である。質問をすることによって、ソクラ テスは同時に内容を運び入れる。プラトンによって伝えられているソクラテスの対話においては、 根本的に論証はソクラテス自身から生じてしまう。「・・・そうではないのか」あるいは「あなた は・・・とは思わないか」といった、対話の進行を形づくっている決定的な問いには、重要な意 図が込められている。「はい」とか「いいえ」で同意や不同意を表現することが、対話者に課せら れる。対話者は、本質的にはソクラテスによって規定されている思考の展開の共同遂行者となる。

ネルゾン的なSDにおいては、論証の責任は参加者の方にある。進行役は間接的なものであり、彼の介入には、主に、参加者の間の対話の舵取りをして、参加者が互いに正しく理解しあい、その都度応答すべき問いから逸れないようにする機能がある。問題に対して控えめにすることで、進行役の負担が軽くなり、その結果、対話の進展と、場合によっては、対話がうまくいくよう援助するための舵取りの手段に注意を集中できるようになる。進行役は、例えば個々の意見を繰り返すことや、表に書き付けることによって、参加者の重要な考えを共通の関心の中へと押しやることによって、問題に対する知識を間接的に持ち込むこともする。進行役の対話の誘導は、ほとんど対話の舵取りの質問や促しだけに使われる。

ソクラテスの対話とネルゾンの S D の構造が図 1、図 2 で表にして示されている。図 1 では対話の進行役(L)と対話者(T)の間のコミュニケーションを示している矢印は非対称な構造を示していて、図 2 では原則的に同権の参加者(T_1,T_2)の対称な構造を示している。進行役と参加者は両対話形式とも対象(S)に向いている。図 2 の点線は、ネルゾンの S D における対話の導きの間接的な性質を示している。ここでも非対称性は存在している。なぜなら、進行役は確かに参加者に向いているが、参加者は進行役に向いていないからである。

両対話形式とも参加者自身の判断が求められる。ソクラテスの場合、「・・・そうではないのか」という問いから対話者の肯定によって、彼の判断で是認された言明となる。すべての異論が退けられたときはじめて、求められている一致へと行きつくことができる。両者とも具体的なものから出発して原則へと達するという道は共通している。しかし、ネルゾンのソクラテス的方法は、進行役が内容に立ち入らないことによって、ソクラテスの産婆術の主張を現実に守っている。

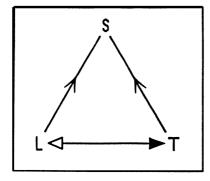


図1:ソクラテスの対話

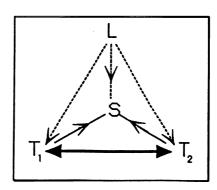


図2:ネルゾンのSD



レオナルト・ネルゾンと彼の哲学

時代的には、ネルゾン哲学は新カント派の後期(1900-1925)にあたる。ドイツ哲学にとって大変動期であったこの時期、種々の新カント派とならんで分析哲学や現象学の趨勢の第一の兆しがあった。ネルゾンは、ヤコブ・フリートリッヒ・フリース Jakob Friedrich Friesが進んでいた新カント派の方向へと意識して近づいた。2つの大きな新カント派――マールブルク学派と西南ドイツ学派――は世紀の変わり目の頃にはネルゾン哲学を心理主義と評して貶めた。マールブルクの新カント派、コーヘン、ナトルプ、カッシーラーは科学的認識の論理的妥当性の基礎づけプログラムを展開したが、それをネ

ルゾンはすでに前期の認識論の著作の中で批判的に、そして論駁的に取り組んでいた。しかしまた、同様にネルゾンはヴィンデルバント、リッケルトの価値哲学とフッサールの現象学的方法をも も論理的に維持できない基礎づけの試みだと批判した。

ネルゾン自身の哲学は、我々の認識と行為の理性的基礎を提示しようとする抽象化の遡及的方法を基礎としている。ネルゾン哲学は今日的観点から見るとネルゾン哲学が戦った前期新カント派の哲学と共通した一連のモチーフを持っている。そのモチーフとは、カントとカントの理性の超越論的分析への回帰、経験的諸科学の増大する意義の前で哲学を基礎科学として救おうとする努力、理性への変わらぬ信念、前期プラトンの理性概念を批判哲学へと統合すること、といったことである。

ネルゾンの著作の中心的な意義は、学的に基礎づけられた倫理学の論文とその実践的な実現可能性の中に見ることができる。この倫理学は、明確に現れているカント的および新カント派的な特徴と並んで、初期分析哲学に対する親和性を示してもいる。この親和性はネルゾンの公理的な基礎づけプログラムや証明の論理的厳格さ、明快な言葉使いに表われている。

ネルゾンは、教育学的、政治的な諸制度を創設し、指導していたので、理論的な概念を実践的、教育的、政治的な行為へと変換した。ここでも別の新カント派の活動との類似性を示している。フリートリッヒ・アルブレヒト・ランゲ Friedrich Albrecht Lange からパウル・ナトルプ Paul Natorpまでの主導的な新カント主義者たちは、実践的な政治学の場面では、社会主義的な理念に参与していた。同様に、新カント派の後期の思想家たちは、すぐれた教育学者でもあった(エドゥアルト・シュプランガー Eduard Spranger とパウル・ナトルプ)。

レオナルト・ネルゾンの中心的な関心事は、哲学を学的に基礎づけることであった。ネルゾンの理論哲学は、イマニュエル・カントImmanuel Kantを引き継いで、認識の条件への(批判的な)問い返しによって、認識を基礎づけるという批判的方法を継承した。その際には、彼は、数学に相似した公理的体系という思考による、古典的な方法をとった。公理的体系では、最終的な判断の基礎づけの問題に直面するまでは、どの判断も別の諸判断によって基礎づけられる。ネルゾンは、懐疑論と独断論の間で、認識の基礎づけという第三の道を追究した。

ネルゾンの目的は、認識の可能性を、非直観的な仕方での直接的な認識への遡及 Rückgriff によって基礎づけることである。「遡及的抽象 regressiven Abstraktion」という方法によって、経験判断が分析され、経験判断を基礎づけている原理が解明される(決して、帰納的に推論されるのではない)。この正当化は「心理学的演繹」によって行われ、結果は自己観察 Selbstbeobachtung における直接的な理性を通じて証明される。この意味で、「理性の自己信頼 Selbstvertrauen der Vernunft」がネルゾン哲学の核心なのである。ネルゾンはこの哲学を、ヤコブ・フリートリッヒ・フリースの成果を引き継いで発展させた。ネルゾンは「内的経験」の意義を認めており、彼の哲学は理性批判に通じている。

ネルゾンは、徹底的に(時には、批判的に)同時代の認識論に取り組んでいたが、数学的なテーマや自然科学的なテーマにも取り組んでいた。1911年の綱領的な論文「認識論の不可能性」は、認識の規準の存在の要請に関する新カント派の議論に抗して、認識論的な先入観として矛盾を論証した。

ネルゾンの認識哲学の容量と概念の精緻さは、今日では一元的に評価できない。具体的な判断においても真なるものを解明しようとするネルゾンの厳格な努力には、現在の「自然化された認識論」という努力 Naturalisierungsbemühungen der Erkenntnistheorie との類似がみられる。懐疑論に反対する態度によって、ネルゾンは疑うことのできない洞察を捨てなかったのだが、こういった態度を、ネルゾンは今日の超越論的語用論という最終的な基礎づけ哲学と共有しており、その際には、まだ相互主観的次元ははっきりとは主題化されていないが、SDの発展の中にすでに内包されている。

SDと討議理論

S D は、1970年代にカール-オットー・アーペルとユルゲン・ハーバーマスによって展開された討議理論と、密接な関係がある。討議理論は、議論の条件や討議の条件(アーペル、超越論的語用論)を発見し、またコミュニケーション的行為の条件(ハーバーマス、コミュニケーション的行為の理論)を解明することによって、討議理論は討議の規範を基礎づける。

アーペルは、哲学におけるいわゆる語用論的―解釈学的転回の相対主義的、非合理主義的傾向を批判した。普遍主義に向けられた哲学に関する彼の第一の主張は、意味条件を疑うことは、いわゆる語用論的な自己矛盾に行きつくので、発言の意味内容を疑うことはできない、という証明にある。ある主張において、主張するという作用が理解可能な言語行為となるために、その作用が妥当なものと認められなければならないということが疑われるような場合に、語用論的な自己矛盾が起こる。

ハーバーマスは、討議の合理的理論に関する基礎を発展させ、4つの普遍的な妥当要求 Geltungsansprüche——理解可能性Verständlichkeit、真理性Wahrheit、正当性Richtigkeit、誠実性Wahrhaftigkeit——を区別した。

証明された討議規範は、結果や未来への責任の倫理の基礎を形成する。議論内での発言の反省

の中から示されるのは、理性的存在者としての人間はすでに他者を同権で、真実を語る討論の相手として扱うこと、主張の検証のための妥当性の規準として理想的な議論上の同意を認めること、紛争状態でも同意による解決を求めることに義務を負っているということである。 したがって、一方では合意関係の改善に努力し、他方では合意による意味と存在の条件としての人間性の維持に配慮するという二重の義務が伴う。

討議倫理の本質的な内容、とりわけ普遍妥当的な真理と相互理解の方針については、SDの実践の特徴でもある。SDと合理的な討議との間の類似性については、グスタフ・ヘックマンの著書『ソクラティク・ダイアローグ Das Sokratische Gespräch』所収の重要な論文で示唆されている。この論文でグスタフ・ヘックマンは、ハーバーマスの討議倫理に結びついているロバート・アレクシー Robert Alexy の「法学的論証の理論 Theorie der juristischen Argumentation」について議論している。

SDが討議理論と区別される点は、とりわけ、SDでは発言や論証を基礎づけることよりも対話の中で提示された原理を実践することが問題となるという点である。こういった理由から、討議倫理という意味では、SDこそが一段と優れて、討議というものを示していると言えよう。

教育的および心理的問題の文脈におけるSD

SDでは、討議している課題についての関心が無制限に優先性をもつ。したがって、SDは第一義的には、いかなる教育上の目的も、セラピー的目的も追求しない。SDにとって特徴的なことは、反省過程の研究というような問い(例えば、いかにしてSDの参加者は理解に至るか、といった問い)がないことである。こういった問いは、SDから一時的に分離され、例えばメタダイアローグで扱われうる。

S Dにおいて参加者は、共同的思考によって、義務的な諸判断に至るということを経験する。こういった意味で、S Dの実践と教育的作用とが結びついている。別の面で、判断力のある人を育成することを目的とする教育的手法、セラピー的手法が、主要な点で、S D との類似性を示していることは驚くべきことではない。

SDと政治教育 politische Bildung

レオナルト・ネルゾンはソクラテス的方法を発展させただけでなく実践もしたし、政治上の交友範囲でもSDを指揮した。このSDの目的は、絶対不可欠な諸価値について確認することで、共同して適切な行為の決定を見出すことである。SDの結果として生じる確信が、後々、彼の友人に関して言えば――回顧してみるに――抵抗運動や亡命地で、そしてドイツの民主主義制度の構築に際して大きな力を発揮した。政治的そして社会的な現代の問題との直接的な対決の要求と民主主義の根本的価値の背景に関する評価は、1945年以降、再建された PPA において、特にその公開会議で継続して議論されてきている。政治的な生活の基礎となる問い、例えば責任の及ぶ

範囲に関する問い、自由と正当性の関係に関する問い、抵抗義務に関する問いなどがSDの内容やテーマとなりうる。その際、政治は道徳的規準で測られる。そのような道徳的規準となるものが、例えば理性的な利害調整あるいは人間性の原理の考慮といったものである。公共の利益に対する、理性に基づいた共同責任は、ソクラテス者の根本的信念である。

政治教育へのSDの間接的貢献は、おそらく直接的な内容への貢献よりもずっと広範囲にわたる――たとえ、SDが、別のテーマ、例えば認識論的テーマや数学的テーマを探究していても。基礎や根拠の探究やその合理的検証は、別のテーゼや立場の取り入れやその検証と同様に、客観的に記述することに役立つし、判断能力を高め、参加者を訓練して「少数派」を力で抑えつけない忍耐強い同意の追求へともたらす。量や外面的な態度ではなく、むしろ議論の能力だけが正当な成果のために意味をもつ。通例、思考は経験した例に由来し、慎重な分析やあらゆる参加者の話に取り組むことにも多くの時間が費やされるので、SDは問題意識や意見表明の能力と、互いに思考の助けをする産婆術Maieutikの理念に適った共同の精神的作業の意味を促進する。その際に、たびたび誤りや迷いが我慢されなければならないので、SDは様々な問題意識に役立つとともに、参加者の自己信頼や理性的解決能力への信頼にも役立つ。したがって、「対話の徳Gesprächs-tugenden」というものは、ちょうど成人に必要とされるものである。

第三のレベルでは、SDは政治教育に意味をもつ。規則の中で近似的に理解されたコミュニケーションの構造は、抑制されない討議(たとえ、実際の対話が終わった後でも)を反映している。抑制されない討議においては、ゆがみをできるだけ排除して、あらゆる参加者が同権で、理性に基づいて最良の答えを求める。SDは平等、団結、参加、紛争の暴力なき決着、同意といった原理を実現する。普遍的な諸価値という理念も、批判的検証や、新しいもの異質なものに対して開かれていることといった理念と同様に上記の原理に属している。理解や行為様式においてだけでなく、構造的な条件においても示される。SDの規範的な基礎は上述の民主主義的諸原理にある。したがって、SDは多様な仕方で、理性の実践に寄与する。

テーマ中心的相互行為 Themenzentrierte Interaktion とSD

ルース・コーンRuth Cohnの展開したテーマ中心的相互行為TZI、生き生きとした学びとグループ内での開かれた相互行為の促進のための方法は、ヒューマニスティックな心理学や教育学のもっとも重要な相互行為の形式に属する。TZIとSDは、コミュニケーションの実践やルールに関して、一連の共通性を示しているし、また、異なった志向ももっている。

TZIにおいては、真なるものの探究は問題ではなく、参加者の個性の発展やグループ内でのテーマの最良の審理が問題となっている。その際に重要なことはグループ内の各個人が自分自身の態度を表明し主張することであり、そして、いかにそうするかである。それに対してSDの場合、まず第一に問題となるのは、我々の確信の普遍的基礎の探究の際の、合理的議論とその基礎づけである。あらゆる物事に対する観察的な認識とその基礎の探究が、コミュニケーションの要点をなす。TZIにおいては、主眼となるのはテーマに関してだけでなく、参加者の、合理的でなく主

観的な表明にある。両方の間のバランスが最良のコミュニケーションの構造として求められる。 SDでは、個人的問題や主観的問い、また、妨害といったものは、対話とは離れたメタダイアロー グにおいて、それが当の対話に有益な限りで取り入れられる。

TZIとSDの明らかに区別される目的設定とそこから生じる構造的な差異にもかかわらず、両者の対話形式の実践に関して、一連の共通性がある。例えば、信頼性を要求すること、偏向した発言の禁止、異なった意見を真剣に受け止めることの要求、参加者すべてを対等な対話者として認めること。SDは、まず、遡及的抽象で得られた認識へと導くが、その際、少なくともルース・コーンがTZIの目的設定として指定した目的、コミュニケーションの強化、「我々」という感情Wir-Gefühlの強化にも役立つ。

ロゴセラピー Logotherapie とSD

フランクルFranklは「意味への意志」を強調して、いわゆる自らの第三のウィーン学派を、フロイトの精神分析(「快楽への意志」)とアドラーの個人心理学(「力への意志」)から区別した。意味に対する人間の意志は、ロゴセラピーにおいて経験的に証明しうるものと考えられ、そして、意志の自由は人間に属し、どんな状況の下でも生は意味のあるものだということが前提とされている。 ヒューマニスティックな心理学とは異なり、 ロゴセラピーにおいては自己実現 Selbstverwirklichung ではなく、人間的な現存在の最高の目的として、自己超越 Selbst-Transzendenz が考えられている。

フランクルによれば、人間存在は3つの相互浸透的な次元がある。彼の次元的存在論では、フランクルは自らの学派が精神的あるいはノエシス的次元の心理療法の中の唯一のものとして適切な地位、つまり最高の地位を得ることを要求する。ノエシス的な領域は肉体や存在に対する自由な意見の表明の場、価値了解や価値に関する意志決定の場である。したがってソクラテス的思考との近しさは明白である。あらゆる境遇において、自分自身に対して距離をとれる能力が人間にはあると信じ要求する。ソクラテスが、死に直面してもなお、自己を吟味する態度を取ったときに、そうしてみせたように。

治療的プロセスでは、意味の探究は、価値意識について目覚めさせること(あるいは目覚めること)と価値の吟味の訓練と同じ意味である。決定的な弱点はそうして克服されることになる。下された決定は責任を自覚して――抵抗にめげずに――行為に変換される。

判断と価値表象についての基礎づけが行われるSDに、まったく似通った期待が結びついている。ソクラテス的方法で鍛えられ、経験を積んだ人たちは、自律して、根拠づけられた判断に至り、その判断にしたがって行為を導く状態になる。ロゴセラピーが密接に結びついている治療的意味を取り去り、「教育的な考え方」になるところでは、ロゴセラピーは教育に関するソクラテス的な考え方に特に近づく。

(翻訳 もりよしちか)

- $\ @$ 1997 by Philosophisch-Politische Akademie, Sitz Bonn





第3回ソクラティク・ダイアローグ国際学会より